

茅ふきたより

巻頭インタビュー

当り前の集落が残ってほしいから、
自分たちに提案できることを考えたい

長野直人さん 茅葺き師

京都府南丹市美山町生まれ 37歳
美山茅葺株式会社 専務取締役



▲三方五湖の舟小屋茅葺き現場にて

も く じ

- 01 巻頭インタビュー 長野直人さん
- 02 第3回茅葺きの里見学研修会北海道旭川市・平取町
- 04 会員からの報告 蓼科の笹葺きの窖
- 06 理事の紹介 杉岡世邦
- 07 会員からの受賞報告
- 08 イベント情報
- 第6回茅葺きフォーラム 東広島大会

「酒井田柿右衛門邸茅葺き
屋根葺き替え作業見学会」に参加して

この仕事をしはじめたとき、茅葺きに今も住んでいる人たちの姿を見て、理想的なのは、やはり昔の生活スタイルだなあと思いましたね。自然とか、人間の営みの世界とかが、ごく当り前の形であり続けるのが難しい時代だからこそ、今はそれを強く感じますね。もちろん、茅が維持できなくなつた事情も知っていますが、その前にこれからの世代に対して、茅葺きに住みたいと思わせることを明確にさせることが大事ですね。それを自分たちが、茅を葺く人間として提案しないといけない。茅に携わるものたちが、お互いの持ち味をうまくリンクさせて、出来るだけ発信させることですね。さいわいに今は、地方から若い人が茅葺き師になりたいといって、我々のところにも来ます。あるいは大学を終えてからの人も。そして茅を通じた横のつながりを持ちはじめていきますね。歓迎したいことです。

自分は美山に生まれて、小さい頃はまわりに茅葺きがいっぱいありました。それがトタンで覆われ始めたりすると、寂しい気がしましたね。高校2年か3年の頃、中野誠さんが茅葺き職人に弟子入りしたのを知ってました。わりに家が近かったんです。それで何となく自分も、将来的には茅葺きの仕事をしたいなと思っていました。そして福岡の大学で建築を学んでからも、広い世界の中で、自分のやりたいことをやりたいと考えてましたね。そんな頃に、自分の生まれ育つた地域を客観的に見つめ直してみると、やっぱりここだ、と。実家からも通えるし。それでふるさとに戻ってから、中野さんと一緒に会社設立をして。自分は天理の茅葺き師田中正光さんのもとに、2年半の武者修行をしに行きました。田中さんの、こだわりの姿勢に学ぶことは本当に多かったですね。

今やっている舟小屋は、三方五湖ですと生き続けてきた建物で、古いものが3棟あり、その横に新しく3棟建てています。目的は観光資源なのですが、切妻の昔の姿で、構造材はナラです。水に強いです。屋根はヨシとススキの混ぜ葺きで、40センチの葺き厚にして、棟には杉皮をかぶせます。古い舟小屋は簡素な造りですが、昔は船が漁師などの貴重な交通手段で、今の自動車みたいに一家に一艘あったそうですね。だから、心情的には床でも張って、水辺に憩う建物として使われるとおもしろいかとも。

(聞き手 坂本善昭)

風土と文化・時空を超えて

第3回茅葺きの里見学研修会

(北海道旭川市・平取町)

柳沢道生



9月第4週の週末、首都圏はめっきり秋めいてきた。でも、新千歳空港はより爽快な秋空であった。9月27日(土)13時、空港ロビーに集合。2台の車に分乗し、道央高速道を北に進む。2時間半ほどで旭川の市街地に入る。市の北西・北門11丁目、新興住宅地の一角に、川村カ子ト(かねと)アイヌ記念館はあった。手造り感に満ちた記念館本館と売店、一見ワイルドだがよく見れば丹精されている庭、その一隅に笹葺きのアイヌ伝統住居・チセがあった。ここは大正5年(1916)に開館した、最古のアイヌ記念館である。アイヌの集落・コタンを取り巻く環境は、百年近い時代を経て都市へと激変していたのだ。

アイヌの伝統衣装・アツシを着た三代目館長・川村兼一氏の解説でチセを見学。屋根材はエゾマツ、棟木はオヒョウニレ材をカバの皮で覆う。壁材は縦にナラ、横はヤナギ、これらの構造材を組み、クマザサ5枚1組とした束で、壁を造り屋根を葺く。クマザサは自生のものを、男



▲川村カ子ト(かねと)アイヌ記念館、クマザサで葺いたチセ

が刈り、女が束ねる。1棟のチセには約3トの笹を要するという。建物は神聖な方向、ここでは川上向きに建てられ、その方向に神の窓、右側の壁に明かり取りの窓、炊事の水を捨てる窓、神の窓の反対側に入りが造られている。神の窓の左横には祭壇が祀られ、シマフクロウを象った木像に、川村家の家紋・シャチが刻まれていた。神の窓の先の地面には1本の横木で結ばれた木製の祭壇が7本立てられ、左が先祖供養、その右側に山、川、森、地などの神が祀られている。部屋中央に長方形の囲炉裏、火の神を祀る祭器が置かれ、上には獣の油を入れたシカの膀胱などが吊るされ、囲炉裏の左側には寝台が置かれていた。チセは女性が所

有、その女性の死に伴い、焼かれて女性の魂とともに天国に召されるという。男性の死に際しては、チセに魂が迷いこまぬよう、霊的バリアが張られるそうだった。えらい差である。

次に庭の樹木、シナノキ、ポプラ、イチイ、クルミなどを拝見。矢に塗ってクマザサに用いたというトリカブトの紫色の花が印象的だった。本館に入ると当館の由緒が示されていた。初代館長は川村イタキシロマ。上川アイヌの長(おさ)。石狩川河畔に住んでいたことから、川村姓となった。館名の由来となった川村カ子ト氏はイタキシロマの子息で2代目館長。鉄道測量技手(ぎて)を務めた。当館の収蔵品の大半はカ子ト氏が収集したという。現館長はカ子ト氏のご子息だ。

展示品、中でもアツシの模様の解説が面白い。上川アイヌの模様は地味だが、平取アイヌは派手だそう。また、当館と北海道教育大学旭川校との間の道路、かつては川だった。最盛期にはシャケが1



▲三代目館長・川村兼一氏の解説、チセの囲炉裏にて

日200尾捕れたという。旧陸軍が置かれた後道路とされ、川は暗渠となった。このチセは館長が地域の人々の協力を得て施工。近くの嵐山公園に展示しているチセは、来年改築予定とのことであった。

余裕があれば嵐山公園へも、という予定であったが、まるでウォーキング・エンスାଇクロペディア、川村館長のお話は尽きず、ここから直接宿へ向かうこととした。富良野国道を一路南下、3時間余で沙流川温泉・日高高原荘に着く。大広間で夕食を兼ねた懇親会が催され、話の花が咲く。

翌朝、色づきはじめた高原の紅葉を眺めつつ、沙流川沿いの日高国道を南西・川下方向に進む。約1時間で平取(びらとり)町に着く。平取町立二風谷アイヌ文化博物館へ、広い前庭の復元されたチセの集落が目をはく。

平取町教育委員会岡田課長の解説で、チセなどを見学。まずポロ(大きい)チセ。一般のチセの約2倍。昭和60年に復元、平成20年に改築された。屋根はアシ葺き、壁もアシ張り。アシは元々沙流川流域の湿地に自生、二風谷ダム建設後は、千歳付近のウトナイ湖や石狩川河口付近から調達している。近代前半のチセがモデル。後に壁は市販の板材に変わり、柱など構造材も年代で変化した。近代初期



▲二風谷アイヌ文化博物館、ポロチセ



▲二風谷アイヌ文化博物館、プー

には電燈、窓ガラス、ドアが導入された。前小屋・セムは大抵のチセにあり、防寒が主目的。向きは神聖な方角、ここでは東・南東。窓は3つ、これは上川と同様だ。普通のチセ、小熊の檻・ヘベレセツ、高床式倉庫・プー正倉院を想起させる三角材、ネズミ返しを備え、奄美の高床式倉庫と類似が指摘された。狩（仮）小屋、唐臼・イユタツ、舟小屋と復元され

た丸太舟、男女別の厠小屋など、様々な建物が復元・展示。一つのチセでは伝統織物の作業が実演されていた。

そこから車で数分の菅野茂二風谷アイヌ資料館へ。アイヌ民族初の国会議員となったアイヌ文化研究者・菅野茂博士（1926-2006）が私費で収集したアイヌ民族と世界の少数民族の民具・民俗資料を展示。昭和47年開館、庭にチセ、プー、ヘベレセツなどが復元・

展示されていた。茂氏のご子息・菅野志朗現館長の解説で館内を見学。特に、各地域のアツシのコレクションと、二階の世界の少数民族の資料展示は圧巻であった。

二風谷は、蝦夷地を北海道と命名した、松浦武四郎が安政8年に記した資料に、ニプタイ・ピラタイ・カンカンの3集落があり105人の住民がいた、とある。志郎氏の曾祖父・トツカラムは12才で和人のアツケシ場所に連行され、賄の重労働を課せられた。トツカラムは左



▲チセを施工した茅葺き職人尾崎氏

手人指し指を切落とし、帰村を図るが果たせず、機会を見てフグの胆汁を顔に塗り疫病を装い、ようやく帰された。現状、二風谷には約200戸・500人が居住し、7、8割が夫婦いづれかがアイヌ民族だという。平取町は日高の名石の産地で、庭石問屋・造園業が多い。農家は二風谷ダム建設の影響で減少したものの、過疎化は余り進んでおらず、若者の数も多いという。心強い。

昼食は、名産・日高牛。その後資料館の庭の、改築されたばかりのチセを、施工した茅葺き職人・尾崎さんの解説で見学。屋根材・壁材はヨシ、一把15センチ位の束を作る。昔はシナノキの皮を裂いたヒモ、今はナイロンヒモで束を編みつける。チセの骨組みは3、4人で、2日ほどで出来る。柱の下に礎石を置かない掘立小屋方式。これは伊勢神宮も同様、との安藤代表理事のコメント。昔は地面を掘るのにホタテガイの貝殻を用いた。屋根・壁は事前にしっかり段取りしてお



▲ヨシを束にしヒモで編みつける

けば10日ほどで完成する。ベテラン2人と補助4人で壁に2日ほど、残りが屋根だ。屋根は内地の本葺きに対して段葺き、どの地域のチセにも共通だ。東面から葺きはじめ、次に西の前小屋、さらに左右から交互に葺き、最後は両方から折り曲げて繋ぎ、棟に横木・サクマを乗せる。今回は7月5日からスタートし、土日のみの工事で先日完成した。ボランティアの参加もあり、通常よりは時間がかかったそうだ。

見学を終え、車1台は新千歳空港へ、私はこの車に乗る。もう1台は白老へ。濃密な2日間の日程を終えた。風土と文化の関わり、時空を超えた共通項と、地域ごとの独自色など、様々な学習できた2日間であった。



▲菅野茂二風谷アイヌ資料館、ヨシで葺いたチセ

会員からの報告

窖（あなぐら）

〈現代と縄文をつなぐ装置〉

一般財団法人 蓼科笹類植物園

理事長 大泉高明



ある晴れた日、「笹離宮」の評議員でもある矢嶋丈了さんが「近くに面白いものがあるよ」というので、「笹離宮」のすぐ近くの泉野に足を運んだ。そこで初めて窖（あなぐら）と呼ばれる竪穴式住居を見た。半地下に六畳間ほどの床があり、地面から合掌型に茅葺き屋根が掛かっていた。竪穴式住居といえば、縄文遺跡などの再現したものは知っていたが、この窖と呼ばれる竪穴式住居は、実用住居として今も農閑期のさまざまな作業や集会などに使われているらしい。この周辺は国宝の「縄文のビーナス」や「仮面の女神」が出土した他、矢じりなどに使われた黒曜石の最大の産地でもあり、縄文時代最大の集落があったと目されている。窖はこの地で縄文時代から営々と使われ続け、今に伝わっているのだ。

「笹離宮」は長野県茅野市にある、笹をテーマにした回遊式の数寄屋庭園で、「桂離宮」の昭和の大改修、国宝茶室「待庵・如庵」、「修学院離宮」などの移築・修復・再建などを手掛けた伝統建築家安井清氏の設計したもの。2万平方メートル

ルの園内は、外露地、内露地、笹類植物園で構成され、全体が回遊式の数寄屋庭園となっている。園内には、和風の山荘をコンセプトとし、方丈の間、木立の間、大広間などを備えた「清風萬里館（せいふうばんりかん）」、梅見門（中門）、待合（翠陰（すいいん）」、立礼茶室「庵（じゃくあん）」、枯山水、降り蹲「随月泉（ずいげつせん）」、大黒天が祀られた校倉造り板倉様式の「神坐（かみくら）」、ハケ岳を写した築山などが点在し、庭園の見どころになっている。植物園エリアには国内外の竹笹類120種が、学術分類に従いつつも、庭園の風景としても両立するように植栽されている。種数120種は世界最多である。



▲園内の園路

「笹離宮」内に笹葺き屋根の窖を造るきっかけになったのは、笹に「ヤネフキザサ」という種があることを見つけたことだった。この名は、島根県など山陰地方で、屋根葺きに用いられたことに由来する。これを知って「笹離宮」に窖を造って、それを笹で葺こうと思ったのだ。泉野の窖を教えてくださいました矢嶋さんは、この窖を建設した当事者でもあり、今は土建会社の会長だが、もとは地元で名人といわれた石工の一人。乞うて弟子にしてもいい、掘った穴の側面の石積みから始めた。多分、私は足手まといにしかならなかったと思うが、矢嶋さんは私の気持ちにだまって受け止めてくれた。その後、安井清氏の「清塾」塾生磯崎進氏、竹笹のスペシャリスト柏木治次氏も加わり、工事が進んでいった。骨組みも立ち、いよいよ笹葺き作業が始まった。笹葺きの作業には多くのボランティアの方々が参加してくれた。この指導には兵庫から茅葺き職人の相良育弥氏らが来てくれた。



▲上：内露地全景
下：消失前の泉野の窖

彼らは今日日本で笹葺きができる唯一の職人だ。

屋根葺きに使う笹の量は想像以上で、床面積10畳の窖の屋根を葺くのに、2トントラック5台分が必要だった。窖の棟には生きた笹を植えて仕上げた。前後の壁も笹で葺き、奥の壁面は笹の葉を内側に見せて、笹のタペストリーのような仕上げとなった。床下には笹の茎を炭に焼いたものと、竹炭を混ぜて敷き込み、床の真ん中には大きな囲炉裏を設けた。完成した笹葺きの窖は「縄文窠（じょうもんか）」と名付けられた。窖の中は驚くほど清浄な空間で、まるで異次元に迷い込んだような気持ちにさせられる。窖は古代より浄化の力があると信じられ、そ



▲完成した窖「縄文窠」の内部 大きな囲炉裏もある

の力で結界をつくとされてきた。「縄文簀」は、現代に生きる我々を、縄文時代に結界をこえてタイムスリップさせる装置なのかもしれない。

会員からの報告

まあたらしい古代

淡河かやぶき屋根保存会くさかんむり

代表 相良育弥

「笹葺き屋根の窖（あなぐら）をつくりたいのですが・・・」

ある日僕の携帯電話に呪文のような文言の電話があった。故安井清棟梁の右腕として知られる磯崎進棟梁の紹介で、大和生物研究所という、笹を用いた医薬品を製造する会社の社長の大泉さんからの電話だった。なんでも長野県の蓼科にある医薬品を製造する工場の敷地内に、「笹離宮」という笹の植物園をつくりたい。そしてその植物園の一面に、窖という地方独特の堅穴の建物を笹葺き屋根でつくりたい。ということだ。アツイアツイ語り口の電話だったので、「とにかく一度お逢いしましょう」ということになり、一抹の不安を感じながらも、大好きなハケ岳に逢えるというだけで行く価値はあると自分に言い聞かせながら、茅葺屋の塩澤さんを道連れに蓼科へ車を走ら

せた。着いてみると、公家のようなお顔だちをした大泉さんと、地元の方々が温かく迎えて下さり、一抹の不安は大きな期待に変わっていた。

窖の骨組みはすでに出来上がっている。あとは笹を葺いていくだけ。さっそく準備して下さっていた刈り取っただけの「笹」を、屋根を葺きやすいようにみなで「茅」につくり直すことに。笹葺きは葉っぱの部分が屋根表面になるように逆葺きで葺くため、葉が美しく折り重なっていなければならず、花束をつくるように丁寧に、みなで笹束をもくもくとする。カサカサと心地いい音がカラマツの林に満ちる。材料の準備が出来たらみなで一緒に屋根を葺く。くさかんむり



▲笹葺きの窖

の十八番、現代版の「結」。笹の心地よい薫りと、みな笑い声。それだけで「来てよかったなあ」と思えた。笹が無くなつて作業は一旦終了。またこの秋に笹を刈り取って残りはその後にするに。

そして秋、今回は僕に笹葺きを教えて下さった山城萱葺株式会社の山田親方と、学生時代から笹葺きをしている丁稚の石井くんも助っ人に、日本最強笹葺きチームで残りを葺いてあげる。とことんまでこだわりたい大泉社長の思いに応えて、棟も芝棟ならぬ、笹棟にすることに。笹博士の柏木先生の指導の下、笹の根をすき込んだ土を棟に置いてゆく。ここで一旦完成はしたが、やはりこだわりの大泉社長。切妻屋根の側面部分を笹壁にし



▲現代版「結」で屋根葺き

たいということ。笹をすべて使い切ってしまったので、残りはまた来年に。

そして二年目。笹葺き窖の柿落としに合わせて笹壁をつくり蓼科へ。笹棟にちよこちよこ笹の新芽が出ていてとても愛い。笹博士の柏木先生曰く、もう一年すると立派な笹棟になるそう。アイヌのチセのように、笹束を壁下地に結びつけてついに笹葺き窖完成！

関わった人達や、里山建築のみなさんも来て下さって盛大に窖で宴。火を囲み、呑んで笑って語っての満ち満ちた時間。薄暗い堅穴の空間で焚かれた火は、カラダに眠る古代を炙り出す。笹葺き屋根の窖は、現代に芽生えたまあたらしい古代なんだろうな。蓼科笹類植物園「笹離宮」故安井清棟梁とそのお弟子さん達の素晴らしい数奇屋建物と共に、笹葺き窖のとつぷりとした空間も味わいに行ってみて下さい。



▲上：棟も芝棟ならぬ笹棟
下：窖の完成をみんなで祝う

会員からの報告

「酒井田柿右衛門邸 茅葺き
屋根葺き替え作業見学会」
に参加して

3月1日、酒井田柿右衛門邸の主屋の茅葺き屋根葺き替え作業見学会が開かれた。「柿右衛門」といえば、白磁に彩られたその美しい赤が柿の色に喩えられる。個人名であり作品名でもあるその名は、世界に知られるブランドでもある。酒井田邸が位置する佐賀県有田の地において、日本初の白くて硬い磁器が生まれたのは1610年代といわれる。初代柿右衛門が始めた赤絵（色絵）は1640年頃に遡る。以来、今日まで、酒井田邸

は、有田の南山（なんざん）とよばれる地にて、十五代となる現当主に至るまで脈々と継承されてきた。

今回見学した建物は主屋である。築250年ほどと伝えられる。その大きさは圧巻だ。桁行13間、梁間2間半、梁間に1間半の下屋が延びる。一間6尺5寸（約1970mm）と間が広く、茅葺き屋根の覆う面積は、149.44㎡（45.28坪）にも及ぶ。近年は、敷地内に別棟の居宅が構えられたため、主屋は仏壇が祀られた精神的な柱として存続している。

主屋は数年前から問題を抱えていた。雨漏りである。前回の葺き替えから20年余り経過し、5年ほど前に補修したが、雨漏りは止まらない。来年（2016

年）は、有田焼創業400周年を迎え、地域において多くの事業が計画されていることもあり、今年のうちに全面を葺き替えることとなった。

今回の改修工事は、古民家の再生工事を主に活動する（有）夢木香（ゆめきこう）の松尾進氏が請け負った。この地域では、葺き、茅葺き、麦藁葺きと、3種の草屋根が存在するが、酒井田家は最上の葺き屋根だ。幸運にも、1年間乾燥された佐賀県嘉瀬川流域の葺き確保できた。茅葺き職人は松尾氏の地元、鹿島市在住の喜多棟梁だ。棟梁は文化財など多くの葺き屋根も手掛ける。昨年9月に相談を受け、今年2月に着工。茅葺き作業最優先での工期となった。ただし、本工事は屋根を葺き替えれ

ば終了とはならない。度重なる増改築を経たため、できるだけ元の間取りに復元しようと考えられているからだ。また雨漏りなどもあり、長年蝕まれた箇所も多い。改修工事はむしろこれからが本番で、半年後の竣工に向け工事は進められる。

見学会は、募集期間が2週間と短い期間であつたにもかかわらず、学生12名を含む70名の参加があつた。松尾さんや喜多棟梁の話聞いた後、足場に登り工事中の葺き屋根を間近に観察した。喜多棟梁への質問が止まらず、時間切れという賑わいようだった。

（当協会理事 杉岡世邦）

理事の紹介

杉岡 世邦

有限会社 杉岡製材所

福岡県朝倉市で、製材業と林業を営む杉岡と申します。製材と茅葺きは、近所で遠い関係。そんな私がなぜ？と不思議に思う方もおられるでしょう。

12年前、私は農山漁村活性化機構の茅葺き調査を請け、隣町のうきは市新川・田籠（にいかわ・たごもり）地区を訪ねました。そこには草葺きのかたちを残す民家群が100棟近く存続していました。しかし、山間部のため通勤等に時間がかかり、若い世代は地域を離れていました。



▲葺き替えの様子



▲酒井田柿右衛門邸主屋

結果、高齢の独居老人が多く、「10年後、この地域はどうなるのだろうか。人と共にこの景観も失われてしまうのか…」そんな危機感を抱きました。

以後、NPO日本民家再生協会での活動を通じて、側面的にその地域に関わってきました。2012年7月には晴れて、伝統的建造物群保存地区に選定されました。そうした活動を通じ、茅葺きの魅力に引き込まれていったのです。しかし、同地区は選定されたのも束の間。同じ月に、九州北部豪雨災害に見舞われました。その被害は甚大なものでしたが、ようやく今年の3月22日、「うきは市災害復旧支援感謝祭」が開催されます。

最後に。新川・田竈の草葺きですが、他とは違った特徴を持つ屋根が見えます。杉皮葺きです。冬に鎌で剥いだ杉の細い皮を、麦藁などの上に重ねて葺かれています。そのルーツを探ろうと安藤先生の調査に随行し、杉皮葺きの苔むしたその詫びた風情に心奪われました。



会員からの報告

全国草原再生ネットワーク 自然保護大賞受賞

全国草原再生ネットワークはこの度、「日本自然保護大賞 教育普及部門」（主催：公益財団法人 日本自然保護協会）を受賞しました。このような賞を当団体がいただくことができたのは、日本茅葺き文化協会をはじめ全国各地の草原の利活用や保全再生に携わる皆さんとともに考え、汗を流してきた成果だと考えています。

草原が失われることで、草原がはぐくむ生きもののみならず、茅葺きをはじめとする地域固有の文化までもが失われようとしています。今回の受賞では、その解決に向けて当ネットワークが取り組んでいる「資料の収集と共有に関する活動」と「普及・啓発に関する活動」について評価をしていただきました。

具体的には、当団体では、草原データベースや草原用語集の作成、草原に係る文献収集を行ってきました。

さらに、全国草原サミット・シンポジウムの開催支援や安全に草原の維持管理作業を行うための「ヒヤリ・ハット事例集」の出版・配布、ホームページによるデータベースの公開等を行っていま



▲授賞式の様子

す。ホームページは今年1月にリニューアルし、データもかなり充実してきました。是非一度ご覧下さい。（<http://sogen-net.jp/>）

日本全国の草原について網羅的に調べられた情報はこれまでに無く、その危機的な状況については、一般的には知られていないのが現状です。また、その価値についても理解されていない現状があります。今回の受賞を良い機会とし、更なる情報の蓄積と共有を図り、日本各地で守られている草原の価値・意義の再評価へとつなげ、草原の保全・再生や草原を守る団体のネットワークづくりに貢献できるよう努力してまいります。日本茅葺き文化協会をはじめ草原の価値の大切さを共有する団体との情報交換もこれまで以上にできればと考えていますので、引き続きご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

会員からの報告

NPO法人石川県 茅葺き文化研究会 かなざわ景観協力賞受賞

金沢市の内川地区で、地域住民とNPO法人石川県茅葺き文化研究会が共同で企画した「茅葺きのコミュニティバスづくり」が、昨年秋に行われました。これは、22年目になる「内川鎮守の森ギャラリー」の実行委員会とNPO法人茅文研が、今後に向けての新たな地域イベントとして、子どもたちに茅葺きのおもしろさを体験させようと考え出されたものです。この企画に、金沢科学技術専門学校建築科生徒が設計担当を申し出、北陸学院大学の生徒たちも製作スタッフとして参加しました。そして、昨年11月に無事完成し、大勢の市民たちがイベントを楽しみました。金沢市ではこれらの活動に対し、平成26年度の「かなざわ景観協力賞」を授与し、市長も関心を示しました。



▲金沢市内に茅葺きのバス停が誕生

第6回茅葺きフォーラム 「藝州茅葺きの技と風景」

主催 / 日本茅葺き文化協会 共催 / 東広島市教育委員会

日時：2015年6月6日(土)～6月7日(日)

会場：○フォーラム・総会：東広島市市民文化センター アザレアホール (JR西条駅から徒歩7分)

○情報交換会：賀茂泉駅前ビル4F (JR西条駅前)

宿泊：ホテルカモ (JR西条駅から徒歩5分 送迎バス)

参加費：[資料費] 一般【2,000】円、会員・学生【1,000】円

[情報交換会費]【3,000】円 (各地の飲みもの持ち込み大歓迎!)

[宿泊費]【5,000】円 (税込・1泊朝食付)

[見学会費] Aコース(半日)【3,000】円 / Bコース(1日)【4,000】円(予定)(昼食代含む)

お申込み、お問合せ：日本茅葺き文化協会事務局

申込み締め切り：5月15日(金)

【6月6日(土)】

10:30 開場、受付開始

11:30 日本茅葺き文化協会総会

13:30 第6回茅葺きフォーラム

13:40 講演

「中国地方の茅葺き職人」

坪郷英彦氏(山口大学人文学部 教授)

14:45 第1セッション 開催地より「藝州茅葺きの技と風景」

コーディネーター：米山淳一(地域遺産プロデューサー・日本茅葺き文化協会理事)

「開催地紹介 東広島の歴史的町並みと茅葺き」東広島市教育委員会

「東広島市の茅葺き民家の分布と特徴」

市川尚紀氏(近畿大学工学部建築学科 准教授)

「藝州流を語る」石井元春氏(茅葺き職人)、

沖元太一氏(Earth building、広島茅葺き屋根工事店)

聞き手：上田進氏(西中国茅葺き民家保存研究会)

16:30 第2セッション 各地からの報告

「(重要文化財) 門脇家住宅等保存協会の活動を通して考えたこと」

門脇由己氏(鳥取県・門脇家十二代当主)

「愛媛県東温市井内の茅場と茅講」

笹木篤氏(香川県・建築都市設計INTERSTUDIO)

「イギリスでの茅葺き研修報告」大野沙織(京都府・美山茅葺き)

「次期開催地 紹介」

18:00 閉会

18:30～20:30 情報交換会

同時開催 茅葺き絵画展 樋谷邦夫

【6月7日(日)】

○9:00～12:45 見学Aコース

岩国邸～ホテルの宿～千代乃春酒造～旧街道散策、

志和掘地域センターにて地元交流会、昼食

12:45 JR八本松駅解散

○9:00～15:20 Bコース

Aコース+豊栄町「豊栄の民家」、大和町「専徳寺」

15:20 JR白市駅解散



▲茅場のモニュメント



▲岩国邸



▲専徳寺

茅ふきたより 第15号

2015年3月19日発行(非売品)

発行：一般社団法人日本茅葺き文化協会

編集：茅ふきたより編集委員会

一般社団法人日本茅葺き文化協会

〒300-4231 茨城県つくば市北条184

TEL/FAX 029・867・5829

E-mail info@kayabun.or.jp

URL http://www.kayabun.or.jp

◎みなさんの情報をお寄せ下さい！
茅葺きについてさまざまな情報とご意見・ご要望をお待ちしております。
茅刈り、葺き替え情報大歓迎。事務局宛までお寄せ下さい。

〔編集後記〕
アイヌ文化を訪ねる茅葺き見学研修会は、私にとって生涯忘れがたい旅になりました。そして、今年の茅葺きフォーラムは初めて中国地方、東広島市での開催です。芸州屋根屋という一大職人集団で知られていた広島。その技と風景、そして各地からの報告と今年も盛りだくさんの内容です。東広島でのみなさんとの再会、そして出会いを楽しみにしています！(弥)